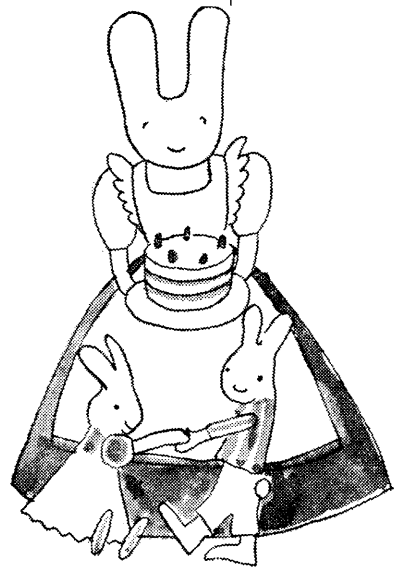


我が家の朝

—— 父親の記録を通して ——

はるにれの会

宮里睦美



朝、私が台所で少々あわてながら食事を作っている。トットトットトコ、とちよっとねむそうな足音がきこえる。どうやら目がさめた息子が母はいずこと起きたしたようだ。こうなると、あとは殺人的忙しさにかわる。

「おしっこ！」

「だっこ！」

「ぎゅうにゅ！」

と、要求は矢継早にくる。その合い間にみそ汁をかきまし、お弁当をつめる。

もともと早起きをした日ならば、それでも余裕をもって一緒に食事もできるが、家でねぼうをした日など、ほとんど走り回って用事をすませ、私は出勤ということになるのです。あとに残るのは父親と息子の二人。勤務先が私よりぐっと近い彼は、私の出かけた後、息子に食事をさせ保育園に送り、自分も出勤するという離れ技をこれから演じるのです。

パンツをはかない、といって逃げまわったり、さて行くとういう時になってウンチをしたり、お気に入りのお

もちやを持つていくと行って大泣きをしたり……その苦
勞は並大抵のものではないようです。

けれどその一方で、この朝のひとつときは、父親と息子
が二人きりですごす唯一の時間でもあるのです。彼は、
その中でずいぶんよく息子のようすをみています。そし
て時折、そこでの発見を保育園への連絡ノートに記して
います。そこに書かれた記録のいくつかを通して、我が
家の朝——父親・息子・母親——を紹介したいと思いま
す。

(1) のどかな朝

——朝、ふとんの中で大きな声で歌をうたつてくつろい
でいるK。朝食のうどんをもって、ブラブラさせ歌をう
たっている。子どもの生活には、いつも歌がある。だか
らしあわせもいっぱい。大人も大切にしたい。

(一歳八ヶ月) ——

——父がひげをそって戻ると、さっきまで遊んでいた部
屋から姿が見えない。あわてて捜すと、ふとんの中にた

くさんの人形を持ち込んでねている。みつけるとニコリ
と笑う。

(一歳九ヶ月) ——

同じ人間で同じ家庭で、昨日も今日も同じになっても
おかしくはない朝なのに、朝の調子というのは、その日
によって大きくちがう。目がさめたあともしばらくふと
んの中でゴロゴロして歌ったり、おもちゃをいじったり
しているような時は、調子のいい時。

そんな時は、大あわての大人のリズムもふとなごみ、
深く息を吸い、ほほえみをかわせる。特に私は、立ち去
っていく身の上。せめて別れの前のひととき、のどかさ
を演じたいと思うけれど、なかなか上手くいかないのも
現実です。

(2) 涙・涙・涙の朝

——朝食の時、なにかが気に入らないのか大泣きする。

せきこむほどの泣き方なので母親がだいてベランダから
外を見せに出た。戻ってきて牛乳を飲み、ようやく落ち
着く。どうやら自分で食べたいのだがうまく食べられな

かったのが原因のようだ。泣きながら母親から離れ自分の席にすわりたいと意志表示するK。人間としての誇りが生まれつつあるのだろう。落ち着いて一人で食事をしだすと、どんどんきげんがよくなって、色々話をしながら食べている。流れる音楽に体をゆらせ、ごはんを机いっばいにまきながら食べるK。ベートーベンの音楽には合わない食べ方だなあ。前衛だよと彼は言う。

(一歳三ヶ月) —

——ウンチをしてパンツをとりかえる時、いつものようにともいやがりパンツを離さない。脱がせかけたのをまたはこうとする。プライドがあるのだろうか。それとも気づかぬうちにどこかでトラウマ(心の傷)を与えてしまったのだろうか。「いいよ、いいんだよ」と言っても無理やり脱がせふいてやる。とても怒っているが、そのあと「けいご、えらいねえ」と言っていたくさんキスをすると、ケラケラ笑ってきげんが戻る。ふとんをあげるのを手伝ってくれる。

(一歳七ヶ月) —

涙には、いつも訳がある。わかる時もあればわからない

い時もある。ただ、流れ続ける涙の様さまは、常に変わらな

い。Kの涙は、時に、成長するがゆえに流れることがある。自分で食べたいけれど食べれないと泣き、パンツの中でしたウンチを何らかの形で意識できるようになった彼は、それ故に泣く。ズボンを自分ではきたくなくなってきたころも大変だった。はきたいけれどはけないと泣き、そばから誰かが手を出したと泣く。

それはもう、手のつけようのない事態といえる。

彼は、このために、何回時間休をとったことだろう。

朝は、Kの成長したいという願望につきあっていられる余裕など少しもないのに、このやさしき父親は、ひたすら待つのです。そして気分転換のきっかけをみつ、上きげんの世界へKを連れていってあげている。せっちな私は、いつも教えられている。

——母が早くでかけるので「チュ」して「握手」して

「バイバイ」したのであるが、しばらくして、食事の準

備を父がはじめると、「ママ」「ママ」と、母でなくてはダメと訴える。しばらく泣きやまない。

(一歳九ヶ月) —

——母が出かける時起きたので、(ドアのしまる音)「ママ」「ママ・ママ」「と言って泣きだしてとまらない。「おんも、おんも」「ママ・ママ」をくり返す。食事もなかなかできなかった。タイミングはむずかしい。

(一歳十ヶ月) —

——一定の別れの儀式をして(握手をして、チュをして、バイバイする)自分を納得させるようになってきたようです。お母さんとはそのすべてのパターンをとれば、うまくいってらっしゃいができるようです。そしておもちやとはチュをして別れます。昨日はほとんど全てのおもちやとチュをしていたのでそれだけで五分近くかかりました。

(一歳十一ヶ月) —

「おかあさん行っちゃダメ!」
Kの泣き声が、ほとんど言葉にきこえてくる。どうやってもダメだった時期をすぎて、一歳九ヶ月ころには、上

手に別れられるようになってきた。泣きそうになっても、「それじゃあ、牛乳と一緒に飲もうね」と言っても、私が牛乳を注ぐと、うれしそうに飲む。Kは、父親が牛乳を注ぐとすると「ママが!」と言って泣いた。誰が注ぐかが、とても重要になる。大人は、そんな感性をもつ持っていないけれど、Kのような子どもは、牛乳を注ぐ手に、おっぱいを見ているのかもしれない。最近Kは(二歳三ヶ月)、あかちゃんごっこを楽しんでいる。私を赤ちゃんにし、自分が母親になる。そして「おいでおいで」と手を出したり「かいしゃいくの」と行くまねをしたりする。そして「ないて」と、私に要求する。私が「エーンエーン」と泣くと、走ってきて、「どしたの。だいじょぶよ」と言う。Kは、くりかえされた朝の別れの印象を遊んでいる。

(3) 遊んで、そして発見の朝

——以前バラバラにしたスライドを、またもとに戻そうといういろいろやっている。(フィルムをマウントからはず

してしまつたのだがそれをまたマウントに入れようとしている。当然できるわけがないのだが、だめだと今度はスライドをけとばしている。笛を吹いて気をまぎらし、今度は、おなかの中（服の中）にスライドをつめこんでいる。

（一歳八ヶ月）——

——テーブルのつなぎ部分にトランプを入れるのを覚える。テーブルでくつろいでいると、下から突然トランプがでてきて驚かされてしまう。いたずらもたくみさを増してきた。

（一歳九ヶ月）——

人間にはいろいろなタイプがあり、それはごく小さいところからいろいろな形であらわれているのではないか、と思う。

Kは、どっかと坐りこんで小さなものをいじりまわすのを好んでいる。だから、身の回りの思いもかけないものが、Kにとっては格好の遊び道具になる。

スライドは、まさに好みのものだった。透明のケースに入ったカタカタ鳴るもの。「何だろう」という顔で手を伸ばす。（Kの熱意に負け、もう使わなくなったスラ

イドを一箱Kに渡す）ふたを取り、バーツと散らす。いじくりまわすうちに中のフィルムがはずれる。はずれる、ということがわかった時のKの驚き。そしてさっそう、全てのフィルムをはずしだす。少し口をとがらせて、本当に真剣にやり続ける。

——あざりのみそ汁を作っているなべの中、モクモクと白いあわの立っているのを見て、「クモ、クモ」と言う。母がすくって捨てるのと、「クモは、クモみせてえ」と何度も言う。「クモはもう空にいっちゃったよ」と言っても「クモ、クモ」……。「じゃあ空を見に行こうか、雲あるかなあ」そして外に出ると、雲一つない快晴。「クモとつてえ……」

空に浮かぶ雲が、家のナべの中にあられ、身近なものになったのだから、彼にとっては、またとないチャンスだったのだろう。だがKよ、雲は、やはり人間には手の届かないものなのだ。

食べ物や様々なものの中にニャンニャンを見たり、コ

ッコ・ゾウ・クマを見るK。アイスクリームにニャンニャンをみつげなかなか食べられなかった時もあった。想像というにはあまりにも自然に見てしまう子ども。このなにげなさに、驚きとすばらしさを感じる。

(一歳十一ヶ月) —

あさりのみそ汁の中のクモは、私自身、捨ててしまったあと、あ！と思った。モクモクとできていたあわは、たしかにすてきな雲だったのだから。

それにしても、空は、子どもにとってどんな印象のものなのだろう。

三月の末、思いがけず降った春の雪が、保育園から帰る時になると、驚くほどさっばりと消えていた。母にだっこされながら家へむかうKがびっくりしてつぶやいた。

「ゆき、きーちゃったねえ。ゆき、きーちゃった」

「本当だね、すっかり雪が消えちゃったね」

「ゆき、おそら、かえったの」

そんなことを話しながら、しみじみ空をみた。遠くを

飛ぶ飛行機をみつけたKは「ちいさいひこうきよ」と言う。住宅に隠れみえなくなると「ひこうきみせてー」と言う。

ある時は、風に吹かれ、雲が次々に流れていくのを見た。びっくりするほどの早さで流れていた。

「ゾウさん、バイバイ！」

「いっちゃったー」

Kと一緒にいると、私は、もう一度子ども時代を味わえるような気がする。驚きと発見に満ちたあの時代を……。

(4) 二人三脚の朝

——さあ、ごはんにしようと座卓を出すと、自分で気、きかせてダイニングテーブルからパンの皿やたまごの皿を運びだした。イスをもつてくると、そこに坐ってパンを食べはじめ。はじめは、ぶどうパンのぶどうをほじくり食べていたが、だんだんムンヤマムンと食べだした。あまり食べない目玉焼きも、スプーンで食べ、一度

ペツとするが、その後手でベタバタと食べだす。

(一歳七ヶ月) ——

——連絡帳をもって家じゅうを逃げまわり書かせてくれない。自分が書くといつてぐちゃぐちゃにしてしまう。

(このページ一面にぐちゃぐちゃが書いてある。)

(一歳八ヶ月) ——

——朝、父をおこそうとしてか、ふとんをろうかまで引っぱっていつてしまう。すごい力だ。

(一歳九ヶ月) ——

——シャケの皮を食べるので父が気持ち悪がったら、ケラケラいつて笑っていた。

(一歳九ヶ月) ——

父親とKの朝の風景は、私に音楽を想像させる。二つ(父親とK)ともなくてはならないメロディーで、ある時は軽やかに、又ある時は激しく、又静かに、独特のハーモニーをつくりながら流れている。それにしても、あわたたしいはずの朝なのに、しっかりハーモニーをつくりだしている父親に、私は感心せざるを得ない。

父親とKの二人三脚ぶりに触れ、私は少しうらやまし

い気持ちになる。だって、私とKは、二人三脚になる時もあるけれど、しっかりダッコや黙ってついてきて式の二人三脚になる時が多いから……。

これは反省すべきことかもしれない。

それとも、私が母であるためか……。

「我が家の朝」を書いている。今は夜中。さて、明日の朝は、どんな朝になるでしょう。ふとんの中で、ニッコリ笑って目ざめの合図をかわせる朝であることを期待して！

訂正 六月号30P上の段「中継」↓「中断」、31P下の段「何度もかけた」↓「何度もかけた」